

冬の観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和三年二月六日(土曜日) 午後二時三十分開演

狂言 伊呂波(いろは)

父親が成人した息子を呼び出し、寺に上がらせて手習いさせると告げます。その前に「いろは」を覚えておこうとしますが、歌の形では覚えられないというので、一字ずつ教えます。しかし、「いろは」の「い」と聞いて藺草の髓を用いる「灯心」、「ろ」と聞いて舟の艚と対になる「權」を連想・即答するとは、なかなか利根なところが見えます。それも「走り知恵」であったのか、「いろは」歌を口写しに暗唱するにとどまらず、父親の叱る言動まで模倣して、父親の怒りを募らせます。

能 雲林院(うんりんいん)

津の国蘆屋の里に住む公光(ワキ)は若い日に某氏から伊勢物語を相伝し、長年愛読するせいか、ある夜の夢に花の下に佇み伊勢物語の冊子を見る盛装の男女を見て、傍らの翁に尋ねると「これこそ伊勢物語の根本、在中将業平と二条の后、所は都紫野雲の林」と教えられて夢が覚めました。そこで急いで上京し、花の都の北山陰、紫野に来てみると、夢に見たとおりの古跡は屋根が破れて瓦に松が生えています。昔は変わらぬ美しく咲いています。夢に見た人はいないので帰ろうとして、公光が家の土産に花を手折るところへ、花守の老人(前シテ)が現れ、落花狼藉を咎めます。二人は互いに「花を惜しむ」、「花を乞う」根拠を詩歌に求めて応酬するうちに心が通じます。公光が老人に問われてここを訪ねた理由を語ると、老人は「雲の林」とは雲林院のこと、ここは二条の後の山荘の跡であり、公光の愛読の心に感じてさらに伊勢物語を授けようとの御意思であろうから、今夜はこの木陰で又寝の夢に期待せよと勧めます。老人は昔男を自称し、名乗りはせずに、夢を見て不審を開くよう言い置いて消え失せます(中入)。その夢の中に現れた昔男(後シテ)は伊勢物語の品々を語ります。弘徽殿の細殿に一目を忍ぶ逃避行、その道筋の名所名所はみな大内にあるとして、語り尽くせない物語をたどり返しては舞い遊ぶうちに、夢の覚める朝が来ます。世阿弥自筆本では二条の後の兄基経が後シテとなり、業平の手から妹を取り返すさまを語ります。

(西村 聡)

前シテ(老 翁)

尉髪をつけ、小尉の面をかける。小格子厚板を着附に着、上に水衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇)

後シテ(在原業平)

覆懸をつけた初冠をいただき、中将の面をかけ、色鉢巻をしめる。箔を着附に着て込大口、指貫をはき、上に単狩衣を着て、腰帯をしめる。(持物、扇)

(午後四時三十分頃終了予定)